

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03268

研究課題名(和文) 地方における「民俗」思想の浸透と具現化—渋沢敬三影響下の民間博物館をめぐって—

研究課題名(英文) On the Concept of Folklore in a Region: Its Penetration and Embodiment

研究代表者

山田 巖子 (YAMADA, Itsuko)

弘前大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：20344583

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、渋沢敬三が指導した民間博物館を多角的に分析し、戦後の東北地方における民俗学の浸透の過程を描き出すことを目的とした。「民俗学」といった概念が自明でなかった1960年代の地方において「民俗学」を受容した人々や、その受容の態度を知ることで、民俗学史を新たに構築することを目指した。対象とした小川原湖民俗博物館は渋沢敬三に仕えた杉本行雄が、実業家に転じて後、温泉の付属施設として1961年に三沢市に建設した民間博物館である。「郷土研究」と民俗学の橋渡しを可能にした初代館長中道等の郷土研究の特徴 博物館を可能にした多様な人々の立場の違い。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、廃館となった地方民間博物館を題材に、旧蔵資料の保存・活用を望む市民や行政とともに、博物館に刻まれた歴史性を明らかにする 資料群の今日的な意義を問う、ことを目指したものである。民間博物館は、母体となる経営体の危機や変更によって、収蔵された資料群は危機にさらされてきた。本研究課題の博物館も当初、散逸が懸念された。本研究は、研究を地域にフィードバックしながら、今後の資料群の保存・活用の「資源」となりうるよう、資料群の目録化、歴史的な位置づけを目指した。多様な人々が関与した民間博物館のあり方は、新しい時代の博物館のあり方を考える上で、その可能性と限界を示す資料となり得る。

研究成果の概要(英文)：This study preliminarily attempted to reconstruct a history of folklore studies in the context of Japan after World War II. In this study, we presented the following findings: The presence of local researchers and a direction of local historical studies, which leads to folk studies later on. The process, where the concept of folk studies spread among a local district (it was revealed based on documents, which were possessed in the Ogarako Folklore Museum). The Museum was founded in 1961 by an industrialist, who was instructed by Keizou Shibusawa. The founder planned to take advantage of folkcraft articles for tourism. The first director of the Museum Hitoshi Nakamichi, on the other hand, attempted to make a linkage between local history and folk studies. Furthermore, the novelist Yoichi Nakagawa, who was involved with the Museum, produced the image of kappa (a Japanese sprite) unlike the conventional tradition. Thus, this museum was established based on a variety of conceptions by different people.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：博物館史 民俗学史 民具 アチックミュージアム 渋沢敬三 郷土研究 新感覚派 ツーリズム

1. 研究開始当初の背景

本研究の発想は直接的には、国立歴史民俗博物館の共同研究「日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎研究」(研究代表 小池淳一)の問題意識に負っている。当該研究は、日本における民俗学の形成・発展過程を、基礎概念や術語を近代日本のさまざまな文脈に置き直し、その結晶過程と有効性の射程とを考えることで描いていくことを目的とした。小池は、民俗学史を描き出す視座として、「外在的、社会的な要請や主張」「内在的な、民俗を研究対象に選び取っていった人間および人間集団」を挙げている(『国立歴史民俗博物館研究報告』165集 2011年)。

このような視座から多様な人間が異なる文脈で、民俗学を受容し、発展させていったことが「学史」として浮かび上がることを目指していたといえる。柳田国男中心主義を相対化し、学史の総体を描き出す基礎作業として、(1)民俗学の成立を支えた郷土史家たちの動きや、(2)民俗学を可能にしたメディアの力、(3)同時代の文脈の中に「民俗学」の位置を問う、いわば「新しい民俗学史」執筆の動きは、着実に成果を積み重ねてきた。小池淳一編『民俗学的想像力』(2009年 せりか書房)はその成果の一部である。

一方、日本の近代化を庶民の感覚や意識の変容と再編成として捉え、それを具体的な事例から浮かび上がらせる手法には、川村邦光の『民俗の知の系譜』(2000年 昭和堂)をはじめ多くの蓄積がある。庶民の日常的な感覚が再編成される画期として高度経済成長期を射程に入れる議論も既に始められている。

本研究は、このような研究の流れを背景に、1961年開館の地方民間博物館である青森県三沢市にあった小川原湖民俗博物館の旧蔵資料を「庶民の生活意識の変換期」「地方における『民俗学的』思想の受容過程」に留意して、「地方における『民俗』思想の具現化」を問うものである。

この研究は、2015年に廃館になった小川原湖民俗博物館の旧蔵資料の保存と活用を呼びかける運動を実施している中で、構想された。弘前大学民俗学研究室では、博物館の廃館に伴い、移管先の決まらない資料群を寄託の形で引き受け、整理、公開作業を進めてきた。その中で、「1961年という早い段階で、青森県という地方で民俗博物館が可能であったのはなぜか」という問いは、残された資料群から解明が可能ではないか、と考えるに至った。高度経済成長期を迎える地方で、生活の中に当たり前であった「道具」が博物館に蒐集され、展示される、それを地方の人々はどのように受け止めていったのか、異なる文脈、異なる背景を持つ人々が、どのように協同して、博物館を可能にしたのかを問おう、と考えたのが、研究の着想の背景である。

2. 研究の目的

本研究は「民具」という概念の提唱者である渋沢敬三の教えを受けた、渋沢の元秘書であった杉本行雄が青森県三沢市に建設した民間博物館である小川原湖民俗博物館の資料群から、地方における「民俗」思想が浸透してゆく過程と、渋沢の理念が具現化してゆく過程を描き出すとするものである。必ずしも「民俗学」や「民具学」が「自明の学問」ではなかった1961年の青森県で「民俗博物館」を可能にした、人々のネットワークと、媒体、地域的なリテラシーを跡づけながら、(1)「民俗」概念が地方で市民権を得ていく諸条件と、(2)外部と地域の文脈の違い、(3)「資源化」の構想と破綻という今日につながる問題群を明らかにする。

3. 研究の方法

筆者らは2015年から、小川原湖民俗博物館の旧蔵資料の一部を現所有者と書類を交わして弘前大学民俗学研究室で預かり、整理作業に従事していた。その結果、基礎的な分類を終え、旧蔵資料には多様なものが残されていることが分かっていた。そのため、資料の種類から、それぞれ担当を決め、それぞれの資料の目録の改訂作業をしながら、博物館に関わった多様な人々と、それぞれの人物の理念を資料群から浮かび上がらせようと試みた。

資料はその種類から(1)民具、(2)郷土史、(3)博物館史、(4)交通史、(5)観光史、(6)文化人の書簡に分け、研究分担者ごとに分けた。(1)小島孝夫、(2)小池淳一、(3)丸山泰明、(4)(5)恩田睦(途中研究分担辞退)、(6)仁平政人がそれぞれ担当した。

また、残されていた渋沢敬三の声のレコードと渋沢の葬儀、通夜の映像については、修復してデジタル化し、復元したのから有用な情報を取り出した。さらには、関係者への聞き取りを行った。

旧蔵資料は青森県内のいくつかの博物館に分けて移管されたため、それらの博物館の収蔵、活用状況を確認し、ネットワークを構築しながら、情報の共有に努めた。

4. 研究成果

(1) 十和田科学博物館の構想と小川原湖民俗博物館の博物館構想とその経緯

渋沢敬三の声のレコードは、1958年に十和田湖畔に開館された十和田科学博物館開館の際の渋沢敬三と設立者の杉本行雄の挨拶であることが分かった。このレコードを修復し、挨拶文を可能な限り翻刻した。また、十和田科学博物館設立の経緯について地方新聞などで確認した。その

成果を「渋沢敬三影響下の地方民間博物館 「声のレコード」をめぐって」川島秀一編『渋沢敬三 小 さき民へのまなざし』(2018 アートアンドクラフツ)に発表した。

青森県では、当時の新聞記事から、1950年代には国立公園十和田湖を活かした新たな観光戦略が求められていた。十和田科学博物館は十和田湖のカルデラの地形を活かし、カルデラと植物などを展示する自然博物館であったが、人文の展示室を準備し、青森県の郷土史家など、長年、地元の研究に携わった人のコレクションを展示することを構想していた。第一回は八戸の郷土史家小井川潤次郎の活動を顕彰し、彼の収集した資料を展示した。また、設立時の組織図から渋沢の博物館構想を支えたのは、渋沢の友人達と「郷土人」、郷土青森にゆかりの知識人たちであったことが分かった。また、十和田科学博物館は当初青森県教育委員会が設立を反対するなど、杉本には厳しい状況であり、渋沢の挨拶には、その事情を考慮し、杉本を労る言葉が語られていた。

小川原湖民俗博物館は、当初、十和田科学博物館と対になるように構想されていた。十和田への入り口である三沢という位置づけは、かつて十和田観光電鉄社長であった杉本の発想で、杉本には、十和田と小川原湖を結ぶ大規模な観光計画があった。渋沢には、「小川原湖を中心とした自然、人文を含む」博物館構想があった。そのため、1961年の段階では、「小川原湖博物館」と称していた。ところが、民具の収集にあたった郷土史家中道等が多量の民具を収集したため、「民俗博物館」へとシフトチェンジしたという事情があった。このシフトチェンジが可能であったのは、岡本太郎や寺山修司といった小川原湖民俗博物館ともゆかりのある人々が牽引した青森県の「土着」イメージの浸透と、恐山の観光地化などにみられる「民俗」を資源化する青森県側の動きがあったと考えられる。

なお、レコードを翻字した全文は、山田巖子『『十和田科学博物館挨拶』・翻刻・解題』として、山田巖子編『地方における「民俗」思想の浸透と具現化 渋沢敬三影響下の民間博物館』(2020 弘前大学地域未来創生センター刊)にまとめている。

(2) 小川原湖民俗博物館旧蔵民具の特徴

小島孝夫は、旧蔵民具の調査成果を「小川原湖民俗博物館旧蔵資料の現状と今後の課題」(山田巖子編『地方における「民俗」思想の浸透と具現化 渋沢敬三影響下の民間博物館』(2020 弘前大学地域未来創生センター刊)にまとめている。

小島氏は、現在三沢市に残されている民具の特徴を、三沢市に残されていた民具調査カードから、「旧蔵者(資料提供者)一覧表」を作成し、その特徴を把握しようと試みた。さらに、1972年から2004年まで同博物館に学芸員として勤務されていた桜庭俊美氏から聞き書きを行い、現在、三沢市六川目団体活動センターに移管された民具の実見から、「小川原湖周辺地域の伝統的な生産道具や日常生活の様子を伝える道具類」「豊富な森林資源を利用した木製の用具類に特徴がある」としている。さらには、今後の保存の方法について、「登録有形民俗文化財」の指定を視野に含めた提言を行っている。

付録として民具カードの一覧を付している。

(3) 渋沢敬三の博物館構想の中での位置づけ

丸山泰明は、「私鉄文化とミュージアム—学術とレクリエーションの両立をめぐって—」(『日本民俗学』296号「第899回 日本民俗学談話会 「民間博物館の可能性」」において、民間企業が郊外に博物館を設立する際の支援事業を紹介し、渋沢の博物館構想の中に位置づけようとした。

また、小川原湖民俗博物館への渋沢の支援活動を位置づけるために「博物館を通じた自己形成と社会貢献 渋沢敬三の思想と民間博物館への影響」を山田巖子編『地方における「民俗」思想の浸透と具現化 渋沢敬三影響下の民間博物館』(2020 弘前大学地域未来創生センター刊)にまとめている。

(4) 初代小川原湖民俗博物館館長中道等の位置づけ

小池淳一は、「郷土研究から民俗博物館へ—中道等の軌跡とその思想—」(山田巖子編『地方における「民俗」思想の浸透と具現化 渋沢敬三影響下の民間博物館』(2020 弘前大学地域未来創生センター刊)に、中道等の学問を年譜や残された資料から跡づけた。その結果、郷土研究に発する広範な関心に支えられた中道の研究姿勢が、地域生活の包括的な把握を博物館の一大眼目として位置づけ、徹底した利用と収集を行うことを可能にしたと述べている。

(5) 文化人と小川原湖民俗博物館

小川原湖民俗博物館を擁していた古牧温泉にはさまざまな文化人が関わっており、それらの人々の書簡が残されている。仁平政人は、「新しいかっぱをつくる—中河与一における「かっぱ村」とロマンチズム」(『郷土作家研究』39号 2019年)において、新感覚派の作家である中河与一と三沢市の古牧温泉との関わりを論じている。古牧温泉の「かっぱ村」の「村長」であ

った中河与一を取りあげ、彼の三沢市との関わりを分析した。中河にとって、三沢市の古牧温泉は、土地の伝承などに深く根ざすことのない「非常な趣味人」である社長による、「新しい設備の場」であり、河童を「日本的なもの」と意味づけようとする彼の態度とは裏腹に彼の描いたかっぱのイメージは、「新しい意外性のある」ものであったことを述べている。

付録として、小川原湖民俗博物館旧蔵の中河与一の書簡の目録を付している。

(6) 資料目録

弘前大学に寄託された旧蔵資料のうち民具については、山田巖子監修・弘前大学人文社会科学部民俗学研究室編『小川原湖民俗博物館 弘前大学寄託旧蔵資料調査報告』(2017 弘前大学地域未来創生センター刊)として既に刊行したが、旧蔵資料のうち書類・写真資料については、本科研の成果報告書、山田巖子編『地方における「民俗」思想の浸透と具現化 渋沢敬三影響下の民間博物館』(2020 弘前大学地域未来創生センター刊)に目録を掲載した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 山田巖子・渡辺麻里子	4. 巻 4
2. 論文標題 地域の民俗や文献資料など文化資源の調査研究と公開および地域ネットワークの構築（4）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 弘前大学特定プロジェクト教育研究センター 地域未来創生センタージャーナル	6. 最初と最後の頁 45-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸山泰明	4. 巻 296号
2. 論文標題 私鉄文化とミュージアムー学術とレクリエーションの両立をめぐるー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本民俗学	6. 最初と最後の頁 177-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山田巖子	4. 巻 296号
2. 論文標題 地方における民間博物館への「まなざし」ー渋谷敬三の声の記録からー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本民俗学	6. 最初と最後の頁 179-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小島孝夫	4. 巻 296号
2. 論文標題 民間博物館の行方、民俗資料の行方ー小川原湖民俗博物館旧蔵資料を中心にー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本民俗学	6. 最初と最後の頁 180-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山田巖子	4. 巻 別冊
2. 論文標題 渋沢敬三影響下の地方民間博物館－「声のレコード」をめぐる－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 やまかわうみ	6. 最初と最後の頁 25-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田巖子・渡辺麻里子	4. 巻 5
2. 論文標題 地域の民俗や文献資料など文化資源の調査研究と公開および地域ネットワークの構築 (5)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 弘前大学特定プロジェクト教育研究センター 地域未来創生センタージャーナル	6. 最初と最後の頁 45-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 仁平政人	4. 巻 39
2. 論文標題 「新しいかっぱ」をつくる－中河与－における「かっぱ村」とロマンティズム	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 郷土作家研究	6. 最初と最後の頁 27-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田巖子・渡辺麻里子	4. 巻 6
2. 論文標題 地域の民俗や文献資料など文化資源の発見と活用に関する「青森モデル」の構築と展開	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 弘前大学特定プロジェクト教育研究センター 地域未来創生センタージャーナル	6. 最初と最後の頁 67-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山田 巖子
2. 発表標題 渋沢敬三影響下の地方民間博物館－小川原湖民俗博物館の学史的意義－
3. 学会等名 日本民俗学会第69回年会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 丸山泰明
2. 発表標題 私鉄文化とミュージアム－学術とレクリエーションの両立をめぐる－
3. 学会等名 日本民俗学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田巖子
2. 発表標題 地方における民間博物館への「まなざし」－渋沢敬三の声のレコードから－
3. 学会等名 日本民俗学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小島孝夫
2. 発表標題 民間博物館の行方、民俗資料の行方－小川原湖民俗博物館旧蔵資料を中心に－
3. 学会等名 日本民俗学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田 麗子
2. 発表標題 グループ発表「地方民間博物館とその時代ー小川原湖民俗博物館の軌跡ー」趣旨説明
3. 学会等名 日本民俗学会第71回年会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田 麗子
2. 発表標題 渋沢敬三のネットワークと小川原湖民俗博物館（グループ発表）
3. 学会等名 日本民俗学会第71回年会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小池 淳一
2. 発表標題 中道等の民俗学と博物館（グループ発表）
3. 学会等名 日本民俗学会第71回年会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸山 泰明
2. 発表標題 博物館史における小川原湖民間博物館の特徴（グループ発表）
3. 学会等名 日本民俗学会第71回年会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小島孝夫（グループ発表）
2. 発表標題 民間博物館における民俗資料継承の課題－世代間の民俗資料の捉え方をめぐって－
3. 学会等名 日本民俗学会第71会年会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 山田巖子編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 弘前大学地域未来創生センター	5. 総ページ数 91
3. 書名 市民と文化財：博物館的想像「力」 - 渋沢敬三と今和次郎：民具学・考現学と青森県	

1. 著者名 山田巖子編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 弘前大学地域未来創生センター	5. 総ページ数 133
3. 書名 地方における「民俗」思想の浸透と具現化－渋沢敬三影響下の民間博物館－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

小川原湖民俗博物館の研究は、旧蔵資料の保存活用の活動とともに行った。したがって、旧蔵資料の一般に公開する展示会を期間中に4回企画した。2017年には弘前大学寄託の民具を8月10日に弘前大学において一般公開した。また11月25日には東北六県地方民俗学研究会合同研究会のテーマ「民俗資料の『発見』と新たな『活用』の可能性を探る」にあわせて、市民と参加者を対象にした民具の展示を弘前大学で行った。2018年には8月10日に「小川原湖民俗博物館旧蔵資料展－資源化への道」と題して、寄託資料のうち、民俗映像や1960年代から70年代にかけての観光パンフレット、民俗芸能団体の資料を弘前大学で公開した。2018年7月には、寄託資料のうち整理・調査を終えた民具を三沢市に移管した。2019年8月10日には旧蔵資料のうち民俗写真や観光資料をいずれも弘前大学で展示・公開した。また、2017年度、2018年度には三沢市が旧蔵資料を公開する11月、12月に合わせて、整理・公開作業の協力を行った。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	丸山 泰明 (MARUYAMA Yasuaki) (10409956)	神奈川大学・国際日本学部・准教授 (32702)	
研究分担者	仁平 政人 (NIHEI Masato) (20547393)	東北大学・文学研究科・准教授 (11301)	
研究分担者	恩田 睦 (ONDA Mutsumi) (50610466)	明治大学・商学部・准教授 (32682)	
研究分担者	小池 淳一 (KOIKE Junichi) (60241452)	国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・教授 (62501)	
研究分担者	小島 孝夫 (KOJIMA Takao) (60286903)	成城大学・文芸学部・教授 (32630)	
研究協力者	櫻庭 俊美 (SAKURABA Toshimi)		元小川原湖民俗博物館学芸員
研究協力者	福島 春那 (HUKUSHIMA Haruna)		元青森県史編さん室
研究協力者	長尾 正義 (NAGAO Masayoshi)		元三沢市教育委員会生涯学習課

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	古川 実 (KOGAWA Minoru)		元青森県立郷土館学芸課